

# 『猫の日常』

作・演出 春田 鮎



## 「登場人物」

タマ子・・・伊豆屋の猫  
熱海(あつみ)・・・伊豆屋の店主  
河津さくら・・・恋に悩むOL一年生  
伊東康成・・・常連 売れない作家  
静岡みかん・・・八百屋の看板娘  
波やっこ・・・山の上に暮らす芸者  
沼津先生・・・獣医  
アンディ・・・沼津動物病院の助手  
メジナ・・・釣り人から魚をもらって暮らす雄の野良猫  
ユゲ・・・温泉宿に飼われている牝猫  
キンメ・・・旅先で出会うさすらい猫

◆一幕

ある雨の日。小さな食堂兼駄菓子屋の伊豆屋にて。  
拾ってきた猫をタオルでぬぐう店主の熱海。

熱海N「私はお爺ちゃんから引き継いだ、小さなこの店“伊豆屋”を切り盛りして暮らしてる。東京に出てデザイン会社に就職するも上手くいかず、この街に帰って来たUターン組だ。唯一の親族だったお爺ちゃんも亡くなって、ひとり気ままな毎日を結構気に入ってたんだけど、それも終わり。この日を境にね。相棒の名前はタマ子。あゝあ、一年前のあの雨さえ降ってなければね」

熱海「タマ子―！タマ子ってば！？いないの？いたら返事くらいしなさいよ！」

タマ子「うるさいなあ、もう、人がせつかく気持ちよく寝てたっていうのに」

熱海「文句ばっか言ってるじゃないで、ネズミでも取ってきなさいよ。最近、ちよろちよろしてるでっかい奴がいるのよ」

タマ子「ネズミ？あのか、今どきネズミなんか取ってくる猫がいると思う？いやなこった、ネズミ取りでも仕掛けたら？」

熱海「やめてよ、ネズミ取りなんて。あんた知ってる？ネズミ捕りって捕まえるだけで、まだ生きてるのよ。それを水這ったバケツかなんかにそのままつっこんで、溺死させるのよ・・・いやー！怖い！ネズミと目なんかあった日にはしばらく眠れないわ、きつと」

タマ子「そんなに嫌がってるくせに、人にはネズミ捕って殺せって言うの？」

熱海「ちよつとあんたさつきから人人って、猫でしょ、あんた？自覚あるの？」

タマ子「ない」

熱海「早！・・・じゃあ持ちなさいよ、猫の自覚」

タマ子「猫の自覚？なにそれ？」

熱海「そうね・・・そうだ、飼い主を癒すのが猫ってもんじゃない？だからほら、肩でももんで私を癒しなさい」

タマ子「えー」

熱海「早く！」

タマ子「もう・・・こう？」

熱海「もつと強く。心を込めて」

タマ子「ふん・・・おりゃ」

熱海「いたたたたあ、ちよつと爪立てないでよ！痛ったいわねー」

タマ子「面倒くさい！もうやだ。で？なんで呼んだの？」

熱海「あ、忘れてた。あのさ、今月またまた売上ピンチにつき、招き猫、よろしく！」

タマ子「まーたー!?!？」

熱海「いいじゃない、ちよつと店の前で毛づくろいでもしてればいいんだから。簡単でしょ？」

タマ子「そうは言うけど、触られたくないようなオツサンとか、ぐりぐりしてくるガキとか、誰でも彼でも愛想振りまいて疲れちゃうよ」

熱海「だってあんたが入口にいますと、つられて入ってくる客が結構いるんだもん。お互い協力して、おまんま食べてくために、さ、出て出て、可愛く鳴くよ、はい練習」

タマ子「にゃー」

熱海「ダメダメ、もつと甘えた感じで」

タマ子「ちえ・・・にゃ〜」

熱海「ま、いいか。はい、出陣」

タマ子「ちえ！」

ふてくされて出ていくタマ子。

かわってそこに客が来る。

熱海「いらっしやいませ」

伊東「・・・」

熱海「お食事？」

伊東「あ・・・はい」

熱海「こちらどうぞ」

伊東「・・・じゃあ、焼きそばを」

熱海「はい。焼きそばね、ちよつと待っててくださいね」

鉄板で焼きそばを焼きはじめる熱海。

伊東「駄菓子ですか？」

熱海「ああ、はい。近所の子供が。お水でいいですか？」

伊東「あ、じゃあ、ラムネを」

熱海「はい、ラムネですね。どうぞ」

伊東「ありがとうございます」

熱海「旅行の方？」

伊東「え？あ、いえ・・・引越してきたばかりで」

熱海「へー、学生さん？」

伊東「いえ」

熱海「じゃあ、お仕事かなんかの関係で？あ、わかった、コンピューター関係かなんかでしょ？自宅でもできるみたいな」

伊東「自宅は自宅なんですけど・・・小説を書いています」

熱海「まあ、小説」

近所の八百屋の娘、みかんちゃんが来る。

みかん「毎度ー、注文の品物持ってきましたー。キャベツ、ニンジン、もやし、玉子、合ってる？」

熱海「ありがと、みかんちゃん。えーと、大丈夫よ」

みかん「はい、じゃあ伝票」

熱海「ごくろうさま」

みかん「あれ？見ない顔ね？」

熱海「最近、引越してきたんだって」

みかん「ふーん。観光客がこんなしけた店に来るわけないもんね」

熱海「しけてて悪かったわね。趣があるとか言つてよ」

みかん「お兄さん、よくいきなり入って来たわね？」

伊東「猫が・・・猫が好きなんです」

みかん「お、タマ子のやつ、ちゃんと役に立ってんじゃん？」

熱海「本当だ」

みかん「野菜買うなら、すぐその八百静、よろしくお願いします。じゃ」

伊東「どうも・・・」

帰っていくみかん。

熱海「はい、焼きそばお待たせしました」

伊東「ありがとうございます・・・（もぐもぐ）」

熱海「小説ってどんな？」

伊東「あ・・・まあ、純文学を」

熱海「へえ、純文学・・・名前は？作家名ていうのかな」

伊東「・・・伊東康成です」

熱海「伊東康成・・・ごめん、知らないわ」

伊東「いえ、全然売れてませんから」

熱海「あら、そう」

伊東「明治から昭和初期の時代や作風が好きで、東京にいるとなかなかイメージに集中できなくて、思い切ってこちらに」

熱海「あー、もしかして、だから着物なの？」

伊東「・・・はい」

熱海「形から入ったわけね」

伊東「そういうわけでは」

熱海「まあいいじゃない。好きな作家とかいるの？」

伊東「それはもう、川端康成先生を尊敬しています！」

熱海「川端康成？おう、伊豆の踊子！ね？そうでしょ？だからここに？」

伊東「はい」

熱海「ちよつと、下の名前の康成は川端康成の？」

伊東「はい、いただきました！この名に恥じぬよう、必ずや純文学の名作をこの地で！」

そこに常連の河津さくらが来る。

熱海「いらっしやい、あら、さくら。ずいぶん早いじゃない？」

さくら「聞いてよ、熱海さん！あの男、彼女がいたのよ！二股！信じられない！絶対殺してやる！」

熱海「ちよつとちよつと、落ち着きなさいよ。男の話はいいけど、仕事は？OL一年生が何やってんのよ」

さくら「仕事？ああ、会社なら具合悪くなったって嘘ついて、営業先から帰ってきちゃった。だって、いきなり別れたいとか言われて、仕事どころじゃないわよ、熱海さん、お酒！キンキンに冷えた生ちようだい！」

熱海「あんたねえ、恋愛なんかで仕事ほっぽり出していいと思ってるの？世の中なめてんじゃないわよ」

さくら「熱海さんだけには言われたくないんですけど！」

熱海「なにがよ？」

さくら「熱海さんだつて全然、仕事頑張つてないじゃない！？私はね、熱海さんのそういうロハスなどこ見習ってるだけです。あくせく働くより、毎日楽しく生きていくの。それなのに、あいつ・・・うああー（大泣）、さつさと結婚して、家でボーつとして暮らしたかったのにー！うわーん！」

熱海「すごい目標、堂々と言うわね」

伊東「あの・・・お勘定を」

熱海「あ、はい、ありがとうございます。焼きそばとラムネで600円です」

伊東「じゃ、これで」

さくら「ひっく、ひっく・・・あんた誰？」

熱海「あ、この人ね」

さくら「この人に聞いてんの！」

熱海「はいはい……」

伊東「伊東と言います……近くに引っ越してきました」

さくら「ふうん、可愛い顔してるじゃない」

伊東「ありがとうございます……」

さくら「何やってんの？」

伊東「は？」

さくら「仕事よ、仕事」

伊東「はあ……小説を少々」

さくら「女いるの？」

伊東「は？……いえ」

さくら「そう。じゃ、キープね」

熱海「キープ？」

さくら「うん、そう。あなた今日から私のキープだから、勝手に女作らな  
いでね。よろしく！熱海さん、生ビールまだ!？」

熱海「あんた……」

伊東「……」

## ◆二幕

外でタマ子とみかんが話をしている。

みかん「ふうん、猫も色々大変だね」

タマ子「まったく、飼い主面して人をこき使いやがって。猫はね、基本的  
には自分が主人だって思って暮らしてるのよ」

みかん「そうなの？じゃあ、熱海さんは何？」

タマ子「何って、あれよあれ、召使」

みかん「ひどい！あんた、雨の中死にかけてたのを、熱海さんが拾って命助  
けてくれたの忘れちゃったの？」

タマ子「忘れるも何も、目も空かない頃の話よ？覚えてやしないわよ」

みかん「だけど、毎日ごはん作ってくれて、やわらかい座布団で眠れるの  
は誰のおかげよ」

タマ子「え？それは……自分のおかげ」

みかん「とことん猫ね」

タマ子「猫だもん。つまり、アタイが毎日可愛いから、熱海は幸せに暮ら  
せるわけ」

みかん「ふうん」

タマ子「だから熱海は自分の日常を守るためにも、アタイを日々、良い状態にしておく必要がある」

みかん「なるほど」

タマ子「何千年も前から猫はそうやって生きてきたのよ。それが、猫の日常」

みかん「屁理屈だけはライオン級ね」

タマ子「わははははは！ガオー！よし、ちよつとお出かけ」

みかん「どこ行くの？」

タマ子「ん？別荘」

みかん「別荘？」

次の日、伊豆屋を訪れる波やっこ。

熱海「いらっしやいませ」

波やっこ「(店内を見回す)なるほどね」

熱海「あの？なにか？」

波やっこ「マリンちゃんはある？」

熱海「マリンちゃん？誰ですか、それ？」

波やっこ「いるんでしょ？隠しても駄目よ。今日はきっちり話つけに来たんだから」

熱海「話をつける？誰と？何の？」

タマ子が帰ってくる。

タマ子「ただいま。熱海、なんだかまた野良猫が増えてるわよ。都会のやつらが捨てに来るのよ、きつと。まったく面倒みれないなら猫飼ったりすんじや・・・ママ！」

熱海「ママ？」

波やっこ「ほら、やっぱりいるじゃない。マリンちゃん、ここが言ってた食堂兼休憩所？」

タマ子「あ・・・あ、そうそう」

熱海「ちよつとタマ子！食堂ってなによ？休憩所ってどういう事！？」

タマ子「いやそれは別に、深い意味は・・・ママ、急に来ちゃまずいよ、ほら、休憩所の係員も困ってるから、とりあえず一旦帰ろ、ね？お願い」  
波やっこ「ダメよ、昨日言ったでしょ？こういう事は早くした方がいいのよ。ねえ、係員さん」

熱海「係員！？なんの係だよ、私は！？」

波やつこ「今日来たのは他でもないわ。マリANCHちゃんを正式にうちの子にしたいの。こちらでも時々お世話になってるのはマリNに聞ききました。でもいつまでもフラフラしてたら何があるか分からないでしょ？だから、きちんとうちで引き取って面倒みていきますから、どうぞこちらさんは、以後マリNのことは気になさらないで結構ですから。よろしいかしら？」

タマ子「あわわわ・・・ママ、いきなりそんな・・・」

熱海「タマ子」

タマ子「ふあい」

熱海「どういことよ？マリNちゃんて誰？あんたこの人に、ここは単なる餌もらせる食堂で、私はボランテIAかなんかの係員だとも説明したわけ？え？そうなの？」

タマ子「いや、別にそんなことは」

波やつこ「あら、言ったじゃない？ママの家が最高だにや、だけどたまた食堂のご飯も食べなくなるから、行ったり来たりが今はちようどいいな、でも最近、猫使いが激しいからずっとママのところにいようかなって」

熱海「猫使い？あ、そう！いいわいいわよ、好きにしたらいいじゃない。あー、もうわかった。マリNちゃんだか何だか知らないけど、見損なったわよ」

タマ子「見損なった？どこがよ？」

熱海「別に私はね、猫のあんたを縛り付けておくつもりなんかないわよ。帰ってこない日があったって、猫には猫の事情つてもんがあるだろうから、聞きもしないし、詮索もしないで来たけど、一応・・・心配はしてたのよ！それをなに、あんた！？人のこと馬鹿にして、係員だなんて嘘ついて・・・お客さん、いいですよ。連れて行ってください」

タマ子「熱海」

熱海「こんなバカ猫、こっちから願い下げだわ」

波やつこ「じゃあいいのね？あとから文句は言いつこなし。行きましょ、マリNちゃん」

タマ子「・・・・・・・・」

後ろ髪惹かれつつ出ていこうとするタマ子。

そこに伊東とさくらが入ってくる。

さくら「あれあれ？タマ子どこ行くの？」

タマ子「アタイはマリN。タマ子は死にました。では」

さくら「え？何？誰よ、それ？え？タマ子！・・・変なの、ねえ、熱海さん、何かあったの？」

伊東「この間店の前にいた、招き猫ちゃんですよね？」

さくら「タマ子。この店の猫よ」

熱海「今日から別の家の猫になるんだって」

伊東「え？」

さくら「なにそれ？」

熱海「知らない。ご注文は？焼きそば？かき氷？っていうか、あんたたち、なんで一緒にいるの？」

さくら「つきあってるから」

熱海「へー、え！？そうなの！？」

さくら「うん。な？」

伊東「まあ・・・」

熱海「キープされたんだ？」

伊東「たぶん・・・」

熱海「そう、じゃあお祝いになんでもおごっちゃう、好きなの言って」

さくら「どうしたの、熱海さん？なんだかヤケクソっぽいけど、大丈夫？」

熱海「大丈夫よ、どうする？」

伊東「じゃあ、僕、焼きそばで」

さくら「あん？まずはビールだろが？」

伊東「はい」

外でみかんちゃんと近所の猫たちが話している。

みかん「ユゲ、知ってるの？その人」

ユゲ「うん。うちの旅館によく呼ばれてくる芸者さんで、山の上の方におつきな家立てて暮らしてるらしいわよ。たしか名前は、波やっこだったかな」

みかん「波やっこ。お金持ちなんだ？」

ユゲ「置屋さんもやってるみたいだしね」

メジナ「置屋ってなにさ？」

ユゲ「メジナ、あんた湯の街で暮らしててそんなことも知らないの？」

メジナ「悪いかよ」

ユゲ「置屋さんって言うのはね、芸者さんたちを派遣してる元締めみたいなものよ」

メジナ「ふーん、けどなんだってタマ子のやつ、その人のところに行っちゃたんだけ？伊豆屋があるのに」

ユゲ「あら？私だって家なんか三軒あるわよ」

みかん「そうなの？すごいね」

ユゲ「猫なんてほしい二、三軒は出入りしてる家あるでしょ？あんた無いの？」

メジナ「無い」

ユゲ「嘘？」

メジナ「だって俺、野良猫だもん」

みかん「わ、カッコいい」

メジナ「へへ。そりゃ俺だって昔は家も飼い主もあつたけどよ、なんか嫌になっちまって」

みかん「何が？」

メジナ「俺たちってさ、きまぐれじゃん？」

みかん「ほう」

メジナ「だけど俺ってこう見えて、結構気使う方なんだよね？」

ユゲ「そうは見えないけど」

メジナ「(咳)、人間は自分が寂しい時とか、悲しい時に俺たちの背中を撫でるだろ？」

みかん「そうなのかな？」

メジナ「嬉しい時に猫撫でないだろ？っていうか、猫好きな奴は、基本的に悲しみとか、切ない気持ちが好きなんだよ」

みかん「ちよつとわかる」

ユゲ「うんうん」

メジナ「だから撫でられたら俺はいつも優しく、そいつの手をぺろぺろなめてあげてたわけ」

みかん「それが嫌になっちゃったと」

メジナ「そう。知らん顔出来ないんだよな。だから俺は野良になって、釣り人がくれる魚を食って、好きなように生きていきたいのよ」

みかん「だからいつも港にいるんだ」

ユゲ「だけどタマ子、ほんとにもう帰ってこないのかな？」

店の中。

さくら「なるほどね。バカだな、タマ子のやつ。熱海さんの事、大好きなくせに」

熱海「・・・もういいよ・・・たかが猫一匹！」

伊東「されど猫一匹」

熱海「え？・・・何よ、何が言いたいのか？」

伊東「猫は素晴らしいですからね。これまでも多くの大作家たちが猫を愛してきました。三島由紀夫に谷崎潤一郎、海外ではヘミングウェイが有名です。意外なのは、あの夏目漱石は猫が嫌いだったそうですが。いずれにしても、猫は不思議な生き物です」

熱海「・・・私は、別に猫が欲しくてタマ子と暮らしてきたんじゃないから、たまたま雨の日に店の前で拾っちゃって・・・だから仕方なく」

伊東「そうでしょうか？たまたまなんでしょうか？雨が降ってる日に、一人で暮らす女性の前に一匹の子猫が現れる・・・」

熱海「さくら」・・・？」

伊東「あー！もうそれだけで文学！猫は偉大なモチーフなのです！」

熱海「びっくりさせないでよ！」

さくら「何よ、急に大きな声で！芥川龍之介でも降臨したの？」

熱海「むしろ太宰治じゃない？」

伊東「僕が好きなのは川端康成です」

さくら「へー」

伊東「・・・つまり、二人の関係は単なる偶然ではなく、出会うべくして出会ったんだと思うんですよ。猫はそういう生き物です。だから」

そこにタマ子が駆けてくる。

みかん「タマ子！？」

ユゲ「帰って来たの！？」

メジナ「早かったな」

店に飛び込むタマ子。

タマ子「(はあ、はあ)」

さくら「タマ子！？」

伊東「ほらやっぱり！良かったですね！」

タマ子「助けて、熱海」

熱海「タマ子？」

すると息せき切った、波やっこと獣医の沼津、助手のアンデイが追いかけてくる。

ユゲ「わ、あの人だ！」

みかん「山の上の」

メジナ「波やっこ」

波やっこ「いた！マリンちゃん、大人しくしなさい！」

タマ子「わ、やだやだ！こっち来るな！」

沼津「こら、待ちなさい！すぐ済むから、大丈夫だから、ほら、あんたたちも黙って見てないでその猫をつかまえて！」

タマ子「つかまってたまるかって言うの！フー」

アンディ「いい子ねく、じっとしててねく、そうよお、そのまま・・・YES！」

タマ子「へん！」

アンディ「(頭をぶつける) Oh, my God・・・たんこぶ出来ました・・・わ、血が出る！あく」

沼津「アンディ！馬鹿、寝るな！」

波やっこ「マリンちゃん！」

店の中を逃げまわるタマ子と追いかける波やっこたち。

熱海「・・・あー、もう、ストップ！！・・・タマ子、こっち来な」

タマ子「熱海・・・」

熱海「どういうこと？タマ子が嫌がつてるじゃない？あんたたちタマ子をどうしようって言うの！？」

さくら「事と次第によつちや警察呼ぶわよ！」

伊東「動物虐待は1年以下の懲役または100万円以下の罰金ですよ！」

沼津「ちよつと、誤解しないでよ！私は獣医。沼津動物病院の沼津です！こっちは助手のアンディ」

アンディ「ハイイ！私、アメリカから来ました。でも、黒船に乗ってきたわけじゃありません！」

みんな「・・・」

アンディ「ソーリー、テツパンのはずなんです・・・」

熱海「獣医？獣医がなんだってタマ子を追い回してるのよ！？」

沼津「それはこちらの女性に頼まれたからです」

さくら「何を頼んだっていうのよ？」

波やっこ「決まってるじゃない。去勢よ！」

みんな「去勢！？」

熱海「・・・タマ子を去勢するって・・・そんなかわいそうじゃない!？」

波やっこ「かわいそう？はん！何を言ってるの、あなた？かわいそうなのは、手術を受けさせてもらってないマリンちゃんの方よ」

みかん「マリンちゃん？」

波やっこ「まったく・・・連れて帰って沼津先生のところまでメデイカルチェックしてもらったら、去勢してないって言うじゃない。そういう無責任な飼い主が多いから、捨て猫が増える一方なのよ。だから私が責任を持つ

て手術してあげるって言うてるのに、突然手術台から逃げ出すんですもの。本当にもう、ほらマリリン！病院に戻るわよ！早く来なさい！」

タマ子「・・・やだ」

波やっこ「え？何て言ったの？」

タマ子「・・・戻らない・・・手術なんかしない！」

波やっこ「マリリン！」

タマ子「ヤダ！どこも悪くないもん。なのにお腹切ったりするのやだ・・・」

熱海「タマ子・・・」

タマ子「怖いよ、熱海・・・アタイ手術やだ・・・ねえ、いい子にするから・・・ここにいていい？」

波やっこ「マリリンちゃん・・・」

タマ子「ここがいいよ・・・タマ子、やっぱここがいいの・・・だめかな？」

熱海「・・・馬鹿・・・いいに決まってるでしょ。ここがタマ子の家なんだから」

タマ子「うん・・・ここにいます。ここにいてあげる」

熱海「あげるってなによ！・・・クスツ（笑）・・・あの・・・すみませんが、タマ子は今まで通り私が責任を持って面倒みます。病院でかかった費用はお支払いします。だから、タマ子を返してください」

波やっこ「・・・本当にそれでいいの？マリリンちゃん・・・」

タマ子「いい・・・」

波やっこ「そう・・・仕方がないわね・・・（ため息）・・・また一人か・・・たまには遊びに来てね、マリリン・・・いいえ、タマ子ちゃん」

出ていく波やっこ。

アンディ「よかったですね。ブス猫ちゃん」

タマ子「シャー！」

アンディ「いたー！ひっかかなくても・・・」

沼津「どうします？」

熱海「何を？」

沼津「去勢」

熱海「・・・よく話し合って、必要であればまたご相談させてください」

沼津「わかりました。だけど捨て猫の問題、あなたも良く考えてみて。猫を飼ってる人全員が考えていくべき問題だと思うわ」

熱海「そうですね」

沼津「じゃあ、これで」

熱海「お騒がせしました」

出ていく沼津先生。

メジナ「無事だったか、タマ子」

ユゲ「心配したのよお」

みかん「おかえり。マリンちゃん」

タマ子「やめてよ、タマ子！」

みかん「マリンちゃん！」

タマ子「タマ子！」

みんな「(笑)」

### ◆三幕

一人店の掃除をする熱海。

熱海N「時の経つのは早いもので、あれから3年、猫も人間もしつかり3年分年をとりました。だけど、猫の一年は人間よりもかなり早く進みます。1歳になった猫は17歳にまでなるそうで、4歳のタマ子は、私とほぼ同い年。そう思うと共感するような、嫌気がさすような、とにかくアラサーの心は微妙です」

そこに飛び込んでくる伊東康成。

伊東「熱海さん！やりました！やりましたよ！」

熱海「どうしたの？伊東君、そんなにあわてて」

伊東「最終に残ったんです」

熱海「最終？いったんなんの！？」

伊東「川端賞ですよ！縁恩社の川端賞！」

熱海「縁恩社？ああ、小説の」

伊東「そうです、出版社の縁恩社！そこがですね、芥川賞や直木賞に対抗して始めた文学賞が、なんと川端康成先生を冠した、川端賞なんです！」

熱海「へー」

伊東「へーって、もうちょっと感動してくださいよ」

熱海「だってまだもらってないでしょ？その賞」

伊東「それはそうですが、文学賞の最終審査に残ったの始めてなんですよ。嬉しくって」

熱海「良かったね。それで？タイトルは？」

伊東「聞きたいですか？」

熱海「別に」

伊東「ちよつと、ちよつと！・・・聞いてくださいよ」

熱海「言ってみな」

伊東「ふふふ、鼻息」

熱海「鼻息！？なにそれ」

伊東「恋愛ものなんですよ」

熱海「それがなんで鼻息よ？」

伊東「だから、伊豆で出会った二人が徐々に鼻息も感じるほど近い存在になっっていくという」

熱海「あほらし」

伊東「そんなあ・・・」

少し大きくなったみかんが配達の商品を持ってくる。

みかん「毎度ー。あ、また来てるの？キープ男」

伊東「頼むからその呼び方はやめてよ、みかんちゃん」

熱海「あ、いいワサビ入ったね。よかった、お父さんにお礼言つといて、みかんちゃん」

みかん「オツケー」

伊東「ワサビ、何するんですか？」

熱海「ワサビ丼。浄蓮の滝の食堂でやってるでしょ？うちでもやろうと思っつて」

伊東「へー、いいですね」

熱海「食べてみる？」

伊東「ぜひ！」

熱海「OK！」

ワサビをおろしはじめる熱海。

そこにタマ子がユゲを連れて帰ってくる。

タマ子「ただいまー・・・っつて、目痛た！」

みかん「あははは、猫の目にも涙」

ユゲ「それは鬼の目でしょ！痛たたたた！」

タマ子「熱海！熱海！なにこれ！？ちよつと、猫だつて犬ほどじゃないけど、嗅覚数万倍よ！やめて、助けて、ひー！」

熱海「はい、お待たせ！伊豆屋の新メニュー、ワサビ丼よ。召し上がれ」

伊東「本当にワサビだけなんですわね・・・」

熱海「そうよ。さ、どうぞ」

伊東「はい・・・ではいただきます・・・(食べる)・・・ふいー！かれー！」

タマ子「(鼻をつまんで) 人間ていうのは、変なもの食べるね」

みかん「猫だって変なもの好きじゃない」

タマ子「何よ？」

みかん「またたび」

ユゲ「あちゃー、そいつを出されちゃうと何にも言えないわね」

タマ子「まったくだ」

熱海「うちじゃ一回もあげたことないけどね。あんたなんで知ってるの？」

タマ子「いや、ほら、以前通ってた山の上の家、あそこで時々・・・」

伊東「なんか罪悪感感じてます？」

みかん「トローンとなっちゃうから？」

タマ子「まあ、そうかな・・・我ながらなんでああなるのか、今だに分からないけど、ハハハ、ねえ？」

ユゲ「本当に、謎の中の謎よ、またたびは」

だいぶ派手になった、さくらがやってくる。

さくら「こんちわー！お、先生、おひさ、元気だった？」

伊東「はい、なんとか」

みかん「あんたと別れられたから、元気だと思うよ」

さくら「こら、静岡みかん！失礼しちゃうわね！すりつぶしてジュースにしちゃうわよ！？」

みかん「さくら姉ちゃんこそ河津桜は早咲きなんだから、さっさと咲いて嫁に行きなさいよ」

さくら「くー、言わせておけばドブスチビ！」

みかん「言って悪いか、尻軽処女！」

さくら「あー、それだけは言っちゃダメなやつ！」

みかん「うわっはははは！勝負あったね！」

さくら「くっそー！」

伊東「あ、あの、喧嘩は良くないですよ・・・ほら、仲良く、ね？・・・  
(おろおろ)」

熱海「いいのよ、いつものことだから」

さくら「・・・ふう」

みかん「・・・はあ」

さくら「飽きたわね」

みかん「飽きたあ・・・この代わり映えしない戦い」

熱海「ほらね」

伊東「はあ」

さくら「代わり映えしない日常・・・こんな街出ていきたーい！」

タマ子「じゃあ出てけばいいじゃん？」

さくら「簡単に言うな」

みかん「さくら姉ちゃん見てると、自分の未来に絶望するわ」

タマ子「じゃあ見なきゃいいじゃん、未来なんて」

みかん「あたしや八百屋の一人娘だよ？否応なしに見えちゃうでしょ、未来予想図」

タマ子「馬鹿だなあ、わかりっこない未来なんか振り回されてどうすんの？」

さくら「それはタマ子が猫だからそう言えるんでしょ？」

タマ子「じゃあ猫になりなよ」

みかん「なれっこないじゃない、人間なんだから」

タマ子「簡単だよ。今日から猫！って決めて生きてけばいいだけじゃん」

熱海「今日から猫？」

タマ子「そう。だっていつも言ってるでしょ？アタイ、猫の自覚ないって」

熱海「言ってるね」

さくら「じゃあ、何だと思って生きてるのよ？」

タマ子「へへへ、えへん！キング！」

みんな「キング!？」

タマ子「そうだよ。王様？悪い？」

さくら「はははは・・・すごい自信ね」

タマ子「違う違う！分かってないな。自分が何者か決めるのは、自分なの！さくらもみかんも自分で決めてないもん」

伊東「なるほど！」

さくら「何がなるほどよ、元彼」

伊東「勝手にキープしたりリリースしたりまったく勝手な人だなあ・・・」

みかん「ごちゃごちゃ言っていないで説明してよ！」

伊東「たしかにあなたたちの将来は不安です」

さくら・みかん「あん!？」

伊東「いえ・・・つまり、さくらさんもみかんちゃんも、自分で自分を何者か決める前に、人や社会に決められてしまっている」とタマ子は言っているんだと思います。環境や社会のせいにしてはいるけれど、本当は自分自分の可能性を狭めている、その事を二人に気付かせるためにタマ子はきつ

と、寝てる!!」

タマ子「むにやむにや・・・」

丸くなって寝ているタマ子とユゲ。

熱海「ご苦労様でした」

さくら「みかん、将棋やろ、将棋」

みかん「何かける？」

さくら「ふふん、韓国製のリップはどう？三島で配ってた試供品」

みかん「いいね、じゃあ私はガリガリ君の当り棒」

さくら「OK、今日私が“と”ね」

みかん「いいよ、じゃんけんぽん！」

伊東「あの・・・」

熱海「はさみ将棋、次やる？」

伊東「いえ・・・いいです、あ、熱海さん、“鼻息”なんですけど」

熱海「もういい、いい、鼻息ってまったく・・・」

伊東「・・・」

店を出て、一人落ち込む伊東。

メジナが来る。

メジナ「一本、あるか？」

伊東「え？ああ、僕、吸わないんだ」

メジナ「煙草じゃねえよ、煮干し。煮干しあるかって聞いてんの」

伊東「あ、ごめん、煮干しは、ないよ」

メジナ「そうか、じゃあ」

伊東にぴったりくっついてくるメジナ。

伊東「・・・何？」

メジナ「いいぜ。撫でも」

伊東「え？・・・いや、別に」

メジナ「遠慮すんなよ。そのかわり今度、な？煮干し、よろしく」

伊東「ああ・・・(しかたなく撫でる)」

なんとなく癒される伊東。

芸者の宴会を伊豆屋でやる打ち合わせをしに、波やっこが来る。

熱海「いらつしやい、あ、波やっこさん、お待ちしてました」

波やっこ「ふう、お得意様のランチに付き合ってたら遅くなっちゃった。お水ちょうだいな」

熱海「はい。だけどいいんですか？うちなんかで芸者さんたちの宴会なんて。焼きそばくらいしか出せませんよ？」

波やっこ「いいのよ、料理なんか無けりや無いほうが」

熱海「どうしてですか？駅の方に行けばましな店、多少はあるでしょ？」

波やっこ「今日日、芸者稼業も厳しくてね。慰労の会やるって言ったって、お金かかるのいやじゃない。でも不平不満も聞いてあげないと、今どきの子はすぐ辞めちゃうのよ」

熱海「置屋さんも大変ですね」

波やっこ「そこ行くと、ここなら鼻から安い軽食しかないし、駄菓子なんかあるから懐かしい！なんて話も出来るし、それになんといっても猫がいるじゃない」

熱海「猫？猫なんかこの辺じゃ別に珍しくないじゃないですか？」

波やっこ「馬鹿ね、流行ってるの知らないの？猫カフェよ、猫カフェ」

熱海「猫カフェ？そんなうちなんか全然カフェなんてもんじゃ」

波やっこ「だからいいのよ。昭和の香りに猫、最高の組み合わせじゃない。

今の子は、そういうの好きなの」

熱海「へー、そんなもんですかね？」

波やっこ「ところで、タマ子ちゃん、今日はどちらへ？」

熱海「さあ、気ままですからね。犬と違って、鎖につながれてるわけじゃないし、したいときにしたいこととして、したくないときは絶対なんにもしませんから」

波やっこ「だけど、そこがいいんじゃない？猫って」

熱海「つんでれてやつですか？」

波やっこ「そう。だから猫好きの人は、犬みたいに献身的な男はあまり好きじゃないのよ」

熱海「関係あります！？」

波やっこ「めちやくちやあるわよ！私なんてその典型。そのおかげでどれだけ男に買いだか・・・あなたもきつとそうよ」

熱海「そうかな？あ、でも確かに無口な人の方がいいかな」

波やっこ「そして、危険な香りのする男よ」

熱海「えー？危険な男はやだなあ？」

波やっこ「危険な香りよ、危険な男は私だっついていやよ」

熱海「猫と男か・・・面白いですね」

波やっこ「この世に男は3種類しかないのよ。ネコ、イヌ、そして」

熱海「なんですか？」

波やっこ「ブタ！あははははははは！」

熱海「・・・」

そこにみかんが飛び込んでくる。

みかん「熱海さん、大変よ！」

熱海「どうしたの？みかんちゃん」

みかん「タマ子が、タマ子が車に轢かれた！」

飛び出していく熱海。

#### ◆四幕

寝かされているタマ子を見つめる熱海。

沼津先生とアンデイが治療をしている。

心配して集まった人間や猫たち。

みかん「ねえ先生、タマ子、もう本当に歩けないの？」

沼津「うーん・・・脊髄を損傷してるからね、もう二度と自分の足で歩くことは出来ない」

みかん「・・・だけど命が助かっただけでも」

伊東「うーん・・・」

さくら「なに？何か言いたいのか？」

伊東「なんていうか・・・猫としては、歩けないくらいなら、このまま・・・その・・・」

さくら「このままなによ？」

みかん「ひどい・・・ひどいよ！伊東康成、てめえ、タマ子が死ねばよかったって言うの！？ねえ、そうなの？・・・うあーん！（大泣）」

伊東「いや、そんなことは言っていないよ。ただ、そのくらいタマ子にとってはつらいことなんだろうなって思って、つまり、その・・・安楽死って方法もあるって聞くし・・・」

さくら「まったく、文字ばかり書いてるからそういう馬鹿な発想になるのよ！見て！生きてるの！タマ子はまだ息してるの！」

伊東「わかってるよ！だけど、こんなタマ子見てられないから・・・」

熱海「みんな落ち着いて」

沼津「とりあえず、目が覚めるのを待とう。大丈夫。タマ子ならきつと」  
アンデイ「あ、目を覚ましたようですね」

みかん「タマ子！」

タマ子「うんん・・・あれ？みんなどうしたの？」

熱海「大丈夫よ、もう少し寝てなさい」

タマ子「私なんで寝てるの？・・・えーと・・・天気がいいから、猫道を散歩したら、風が山のいい匂いがしたから猫坂を登って行って、猫峠に出て道を渡ろうとしたら真っ赤な車がすごい速さで走ってきて・・・ビビッて止まっちゃったら・・・轢かれたんだ。熱海、アタイ、車に轢かれちゃった」

熱海「そうだよ、タマ子。峠の道は気をつけろって、いつも言ってるのに」

タマ子「ごめーん。咄嗟に戻れないんだよね〜・・・ふがあ〜、なんだかまだ眠いや、まぶたが全然あきませーん・・・ZZZ」

沼津「麻酔がまだ効いてるからいいけど、次に目が覚めたら、痛みで暴れるかもしれないから気を付けて」

アンディ「何かあったら電話ください。ボク、すぐに来るからね、OK？」

熱海「ありがとう、アンディ」

アンディ「どういたまして、おだいにじ」

帰っていく沼津先生とアンディ。

帰っていくみかんたち。

二人きりの熱海とタマ子。

タマ子「熱海」

熱海「起きてたの？」

タマ子「うん・・・あーあ、しくじったなあ」

熱海「そうだね」

タマ子「本当にもう歩けないの？」

熱海「え？」

タマ子「先生、そう言った」

熱海「うん・・・」

タマ子「まあ、しょうがないか。自分が悪いんだから、猫はあきらめが肝心じや」

熱海「まだ分かんないじゃない、リハビリすればもしかして」

タマ子「リハビリ？わはははは・・・アタイはそんなことしないよ」

熱海「なんでよ？」

タマ子「なんでって・・・嫌いなもの、頑張ったり、目標立てたり、それにずっと寝ても別に平気だし。眠り猫だね、あははは」

熱海「だけど、散歩も出来ないし、別荘にも行けないし、屋根にだって登れないよ？」

タマ子「熱海がいるもん」

熱海「・・・え？」

タマ子「熱海がいるじゃん。だからいいよ」

熱海「タマ子・・・」

タマ子「アタイはこの家で、熱海がそばにいればそれでいい。もうそれでいい」

熱海「・・・」

#### ◆五幕

一人、店で眠っているタマ子。

メジナたちがやってくる。

メジナ「どうだ？調子は」

タマ子「おう、メジナ。ユゲも」

ユゲ「はい、猫じゃらし。暇でしょ」

タマ子「おー！」

しばらくじやれるタマ子。

ふざけ過ぎて落ちるタマ子。

タマ子「あたたたた・・・」

ユゲ「あ、ごめん、忘れてた」

メジナ「ひでえな、タマ子。高い所から落ちててもバッチリ着地するのが猫  
つてもんだぞ」

タマ子「しょうがないじゃん、歩けないんだから」

ユゲ「毛玉出来てるよ」

タマ子を寢床に戻してあげるメジナ。

櫛を出して、タマ子の毛（髪）をとかすユゲ。

タマ子「サンキュ、ユゲ」

メジナ「涼しくなって、いい猫草が生えてきてるぜ。今年は川筋のエノコ  
ログサもいい味だ。去年は台風が多かったからな」

タマ子「それから？」

メジナ「え？そうだな・・・カラスの弥太郎が死んだらしいぜ」

タマ子「本当？あいつとはずいぶん派手にやり合ってたのになあ、死ん  
だって聞くとなんかちよつとさみしいね」

ユゲ「モモコが今年も六匹生んだって」

タマ子「すげー！モモコ元気だった？このあたりで唯一、アタイと話があ  
う犬だからね。おめでとうって言つといて」

メジナ「あとは、そうだな・・・おい、どうした？」

タマ子「なんだろ？これ・・・目から水が出てきた」

ユゲ「はい、拭きな」

メジナ「港で小鯨があがったら持ってきてやるよ」

タマ子「あ、ごめん。あたい、生ダメ」

メジナ「うそだろ！？」

ユゲ「あはははは」

店を掃除する熱海。

熱海「ちよつとタマ子どいて。そこ、掃除するんだってば」

タマ子「わざと？」

熱海「あ・・・ごめん」

タマ子を移動させる熱海。

タマ子「もつとあつちがいい」

しぶしぶ移動させる熱海。

タマ子「やっぱこっちがいい」

ため息をつき移動させる熱海。

タマ子「やっぱやっぱ、あっちあっち」

熱海「いい加減にしなよ、タマ子！」

タマ子「……ふん……べー」

熱海「……イラつくのは分かるけど……私だって一生懸命」

タマ子「でも歩けるじゃん」

熱海「タマ子……」

タマ子「だつて動けるじゃん！……熱海は自分で好きな時に好きなところに行けるじゃん！……なんでアタイだけ……つまんない！……やっぱりやっぱりつまんない！」

熱海「……どこか行こうか」

タマ子「え？」

熱海「二人でどっかいこうか？車借りて、美味しいもの食べて、綺麗な景色見て」

タマ子「行く！タマ子行く！」

熱海「じゃ、行こ。何食べたい？」

タマ子「カリカリ」

熱海「カリカリ？あんた旅行行くんだから、もっとタイの尾頭付きとか、牛ヒレのステーキとか」

タマ子「アタイ生ダメ」

熱海「あ、そっか」

タマ子「肉もヤ。いつものカリカリがいい」

熱海「(クスツ) 別にいいけど」

タマ子「この間のめっちゃ旨かった！カツオとツナのダブル回遊魚シリーズ！」

熱海「わかった、わかった、買つとくよ。あとは？何もってく？」

タマ子「あとはねー、またたび」

熱海「(笑)」

笑い合いながら旅行の計画を立てる二人。

出発の日。見送りに来たみんな。

さくら「いつてらっしやい」

みかん「タマ子、お土産忘れないでね」

伊東「店のことは心配せず楽しんで来てください。毎日様子見に来ますから」

熱海「別に取りられるようなものないもの」  
波やっこ「はい、これ」

熱海「なんですか？これ」

波やっこ「餞別。なにか美味しいものでも食べさせてあげて・・・ぐすっ」  
タマ子「ママ、死ににくわけじゃないんだからさ」

熱海「これ持つてくので（カリカリ）。でもありがとうございます。遠慮なくいただきます」

アンディ「自分次第で心はいつでも自由ね！ネイティブアメリカンの教えね」

みかん「ネイティブアメリカン？」

沼津「インディアンのことよ。くれぐれも無理しないようにね。良い旅を」

タマ子「はい」

熱海「じゃあ、行ってきます」

出発する二人。ユゲとメジナが走ってくる。

みんなが手を振っている。

ドライブを楽しむ二人。旅を楽しむ二人。

BGM 『Cat Size』 by スージー・クアトロ

とても景色のよい丘の上のベンチ。

タマ子「わあ、すごく気持ちのいいとこだね・・・」

熱海「珍しいわね、あんたがそんなこと言うの」

タマ子「そうかな？・・・たしかにそうだね。だけどなんかここ、初めて見た気がしない。この景色、ずっと昔に見たことある気がするよ」

熱海「へー、猫にもデジャヴあるんだ」

タマ子「デジャヴ？」

熱海「それより、そろそろ宿に入ろうか。少し寒くなってきた」

タマ子「ここで寝る」

熱海「え？だめだよ、せっかくペットOKの宿、予約したのに」

タマ子「いやだ、ここがいい。アタイ、今夜はこのベンチで寝る。熱海は宿で寝なよ」

熱海「そんなこと言ったって、歩けないアンタおいて行けるわけないでしょ？たまには言うこと聞いてよ」

タマ子「ヤダ！ぜったいここで寝る。カリカリだけ置いてって。もう早く行って。一人になりたいの」

熱海「いい加減にしな！子供じゃないんだから！」

タマ子「子供じゃないけど、猫だもん！」

熱海「猫だったら何してもいいって言うの！？」

タマ子「いいに決まってんじゃん！猫なんだから！」

熱海「あー、そう！じゃあもう勝手にしな！」

タマ子「勝手にするもーん」

熱海「まったく、こんな時ばつか猫の自覚出して・・・さらわれても知らないわよ。言い出したら聞かないんだから・・・じゃあねー!」

タマ子「バイバーイ。ひひひひ、一人で野宿なんて久しぶりだなあ、やっぱ最高だね、アウトドアライフ!冬だと寒くてなかなかね、そこいくと秋はいいわ、虫の声はまだ!あ、カリカリ食べよ」

ひとりごちながら夕食を楽しむタマ子。

そこに一匹の猫が現れる。

キンメ「俺のベンチで何やってるんだい？」

タマ子「わ、びっくりしたな。こんぼんは、ここあんたのナワバリ？」

キンメ「いや、まあ、昨日からの寝床ではあるが」

タマ子「ごめんよ、アタイ、足が悪くてすぐに動けないんだ」

キンメ「そのようだね」

タマ子「明日の朝、熱海が来たら」

キンメ「熱海？」

タマ子「あ、私の召使が迎えに来るから、それまでここに居ていい？」

キンメ「ふふん、良いけど、対価はなんだ？」

タマ子「対価？なにそれ？」

キンメ「おいおい、人に頼みごとをしておいて、まさかただで済ませる気じゃないだろうな？」

タマ子「でも、アタイ、何にも持ってないよ？」

キンメ「さつき、かりかり音がしていたが？」

タマ子「ああ、これ？こんなんでいいの？」

キンメ「いい」

タマ子「じゃあ、これで」

奪う様にしてかりかりむしゃむしゃ食べるキンメ。

タマ子「そんなにお腹減ってるなら、カツコつけないでそう言えばいいのに」

キンメ「(むしゃむしゃかりかり)三日間、何にも食べてない」

タマ子「三日も？あんた野良なの？」

キンメ「野良なんて言い方はやめてくれ。フリーランスと言ってほしいな」

タマ子「フリーランス？」

キンメ「そうだ。人間の束縛を逃れ、真の自由を謳歌し、己の力のみで生き抜く、それこそ！フリーランスキャット！」

タマ子「だからそれが野良だって」

キンメ「んっぐ！・・・まあ呼称には各々の見解や地域性もあるだろうか  
らな・・・」

タマ子「アタイは召使の熱海と車で旅をしてる途中なんだけど、あんたはなんでここにいるの？」

キンメ「俺か？俺は・・・さすらいの途中だ？」

タマ子「さすらい？行く当てがないの？」

キンメ「違う！風の向くまま気の向くまま、旅から旅のさすらいが俺の日常だ」

タマ子「よ、フーテンの猫二郎」

キンメ「キンメだ！」

タマ子「キンメ？ああ、あの目がつかい真つ赤な魚か」

キンメ「またまた違う！良く見て見ろ、俺の目を」

タマ子「うーん？わあ、金色だ」

キンメ「ふふふ、生まれたばかりの俺はペットショップの檻の中で、どうやってここから脱走してやろうか、そればかりを考えていた。そんな時、金色の目玉をしている俺を見た金貸しの大金持ちの男が俺を買った。こいつは縁起物だ、きつと更に金を呼んでくるに違いない。そいつは俺を金目と名付けた。だが俺は2歳になった朝、そいつの家から逃げ出して、今日まで旅を続けているのさ」

タマ子「へー、かっこいいね」

キンメ「カツコいい？はん、簡単に言うがな、本当のさすらい旅は厳しいものだ。飼い猫にならなくても、一ヶ所に住み着けば、知り合いも増えるし餌を配る猫好きもいたりして、そんなに苦労せず生きていけるものだ」

タマ子「確かにね。メジナなんかそうだな」

キンメ「しかし、フリーランスはそうじゃない。常に自分で決め、考え、行動して今日の飯と寝床を確保しなけりやならない。けどな、そこがいんだ」

タマ子「どこ？」

キンメ「生きてる！って感じるんだよ。野生に帰るって言ったら大げさかもしれないが、全身の毛が総立ちになるくらい、ビンビンとね」

タマ子「生きてるか・・・ねえ！アタイを連れてってよ」

キンメ「お前を・・・駄目だ」

タマ子「どうしてよ！？」

キンメ「だってお前、自分で歩けないじゃないか」

タマ子「あ・・・そうだった・・・」

キンメ「そんな顔するな。自分を憐れんだり、蔑んだりしても何にもならないぜ。猫なら、最後まで猫らしくいろよ」

タマ子「猫らしく？」

キンメ「そう。猫三ヶ条！ひとつ、人間にこびを売るな。ひとつ、いつでも自由であれ。そして最後、死んでも恨んで出るな」

タマ子「いいね、それ。誰が言ったの？」

キンメ「俺。にやははははは」

タマ子「えー！（笑）」

楽しそうに笑う二匹。

朝。一匹でベンチに寝ているタマ子。

熱海「タマ子？・・・いた・・・タマ子、朝だよ。起きな」

タマ子「うーん、あ、熱海・・・あれ？キンメは？」

熱海「キンメ？誰かいたの？」

タマ子「うん、さすらいの猫、キンメ」

熱海「さすらいの猫？」

タマ子「行っちゃったか」

熱海「何だかわからないけど、次のところ行こ。すごくきれいな湖があるんだって。その水を飲むと、どんな病気もケガも治っちゃうって」

タマ子「帰ろう」

熱海「え？」

タマ子「帰ろうよ、熱海。アタイ、帰りたい。家に帰りたい」

熱海「でもまだ」

タマ子「いい。もういい。どこに行っても、どこにいても、アタイはタマ子。猫のタマ子なんだ！」

熱海「タマ子・・・」

#### ◆六幕

10年後の伊豆屋。

みんなで集まって、タマ子の14歳の誕生日を祝っているが、眠っているタマ子。

熱海N「10年という年月は長いのか短いのか。10年前の過去を思えば、果てしもなく昔のように思えるし、10年先の自分を考えても、ほとんど実感が湧きはしない。それでも確実に時間は流れている。みかんは高校を

卒業したし、さくらと伊東君はよりを戻して結婚して、梅子って女の子まで生まれた。途中、日本を揺るがすほどの大きな地震がおき、店の前の防波堤は3メートルも高くなって、今では浜に出ないと海は見えない。もちろん私も10年分、年をとったはずだけど、まるでアインシュタインの相対性理論のように、私とタマ子では時間の速さが違ってるようで・・・」

さくら「はい、それではタマ子ばあちゃんの14歳の誕生日を祝って、もう一度カンパニー！」

伊東「飲み過ぎだよ、さくら。梅子をお母さんに預けてきたからって、羽目外しすぎちゃ」

さくら「うるさいわね、うだつの上がらんマイナー作家が！」

みかん「あんたら見ると結婚願望、ズタズタになるわ」

アンディ「それならみかんちゃん、私と結婚しましょう！アメリカ人はワイフをとつても大事にしまーす！」

みかん「やめてやめて、毎日愛してるとか言われたら、超うっとおしい」  
アンディ「うっとおしい！？それはすっごく嬉しいって意味ですか？」

みかん「逆逆、真逆！」

波やっこ「たしかにね、結婚は人生の墓場なんて言うけど、一緒のお墓に入れるだけいいわよね」

さくら「あれ？波やっこさん、お相手は？」

波やっこ「いっこないわよ、こんな稼業で。家に帰ってまで男の顔色伺いたくないしね。あーははははは」

伊東「そうか、一緒に入る墓があればこそ、結婚は人生の墓場、か」

さくら「あたしは入らないわよ、あんたと一緒の墓なんか。っていうか、あんた婿養子でしょ？入れてあげないわよ、家の墓には」

伊東「ひどい！じゃあ僕はどうしたらいいんだい？屍（しかばね）をそのへんに転がされて、朽ちた軀（むくろ）になれとでも言うのかい！？」

さくら「いちいち文学的にいうんじゃないわよ！うっとおしい！」

アンディ「さくらさん、何かすっごく嬉しかったですか！？」

みかん「だから真逆だって！」

そこに1匹の猫を担いで沼津先生とメジナ、ユゲが入ってくる。

熱海「どうしたんですか？沼津先生！？」

沼津「それがね、そこまできたなら倒れてたの」

伊東「雄猫？」

アンディ「先生、ここに寝かせましょう」

タマ子の隣に雄猫（キンメ）を寝かせる沼津とアンデイ。容体を調べる沼津。

沼津「たぶん、栄養失調ね。ずいぶん、やせてる。年も取ってるみたいだし。この辺じゃ見ない猫ね」

メジナ「ああ、俺たちも知らないやつだ」

ユゲ「だけど、なかなか男前じゃない？」

メジナ「お前は相変わらずだな」

ユゲ「悪い？猫かぶつてもしようがないじゃない。自分に正直に生きなきゃね、正直に」

タマ子「・・・ん・・・あれ？どうしたの？・・・ん？この匂い知ってる」

熱海「店の前で倒れてたんだって。ちょうど沼津先生が見つけて」

アンデイ「先生に発見されてこの子ラッキーね」

タマ子「・・・あ、思い出した・・・そうだ」

カリカリを雄猫にあげてみるタマ子。

キンメ「うぬぬ・・・お腹すいた・・・あ、カリカリだ」

一口食べて徐々に元気が出てくる雄猫。

次第に夢中で食べる雄猫。

沼津「もう大丈夫そうね。きつと、お腹がすいてたんだわ」

アンデイ「オーマイガ、猫が猫を助けたね、サンキュージーザス！（泣）」

静かに飲み始める人間たち。

猫たちだけの会話が始まる。

タマ子「キンメ・・・でしょ？」

キンメ「ん？・・・ああ、君、丘の上のベンチで会った、足の悪い」

タマ子「そう、タマ子。アタイの名前、タマ子っていうの。あの時、朝になったらアンタもういなかったから、名前も言っってなかったわね。どうしたの？元気だった？アタイはあれからほとんどここから動いてないけど、まあだいたい楽しかったわ。あなたは？まださすらいの途中？」

キンメ「その通り、さすらいの旅猫キンメは健在だよ」

タマ子「私の家の前で倒れてたのは偶然なの？」

キンメ「ああそうさ、またもや腹を空かせてしまつて、君に助けられたのはこれで二回目だね。ありがとう、君は命の恩猫だ」

タマ子「それこそただの偶然よ。恩猫だなんて大げさな」

ユゲ「驚いた。あんたたち、知り合いだったの？」

タマ子「たまたまね」

メジナ「どこから来たんだ？タマ子の知り合いならしばらくここにいたらい。気に入ったらずっと居たっていいんだぜ？野良でいいなら俺がこの辺りのことは全部教えてやるさ」

キンメ「ありがとう、だけど」

タマ子「キンメはね、旅猫なの。ひとところにじっとしてられないのよ。ね？」

キンメ「ああ。それにどうやら、俺はもう、そう長くは無い」

タマ子「どこが悪いの？」

キンメ「うん（腹をさする）。だから、最後の最後、死に場所を探さなきゃならない」

メジナ「そんな古風な猫がまだいたのかい。うれしいね」

キンメ「俺には飼い主はいないが、死に顔は誰にも見せたくないからな」

タマ子「やっぱりあんたはカッコいいね。子供作っとくんだったよ」

キンメ「俺とアンタの？あははは、悪くないかもな」

ユゲ「今からでも遅くないじゃないの？（笑）」

メジナ「そうだよ、タマ子、お前、去勢しなかったんだからさ（笑）」

タマ子「あははは、やめてよ、冗談よ」

キンメ（笑）「ともかくみんな、最後まで猫らしく生きようぜ」

タマ子「猫三か条ね」

ユゲ「なにそれ？」

メジナ「面白そうだな」

タマ子「いい？良く聞きなよ」

楽しそうに猫三か条を唱えあう猫たち。

#### ◆七幕

熱海とタマ子の二人きりの伊豆屋。

だいぶ年をとった様子のタマ子。

熱海「キンメだっけ？去年の今頃来た、あの雄猫」

タマ子「うん」

熱海「元気かね？」

タマ子「うん」

熱海「旅する猫なんて面白いね」

タマ子「熱海」

熱海「なに？」

タマ子「行きたいところがあるの」

熱海「行きたいところ？」

キンメと出会ったベンチ。気持ちの良い鳥のさえずり。

タマ子「やっぱりここは気持ちいいなあ」

熱海「よかったね」

タマ子「ありがと、熱海」

熱海「めずらしい、ずいぶん素直じゃない」

タマ子「ねえ、熱海」

熱海「なに？」

タマ子「熱海に拾われてよかった」

熱海「そう。私もよかった。あんたがいて」

タマ子「熱海？」

熱海「うん？」

タマ子「だっこして」

熱海「だっこ？いいよ、おいで」

タマ子をだっこする熱海。

熱海「これでいいの？」

タマ子「うん。あったかくて気持ちいい」

熱海「よかったですね。お姫様」

タマ子「キングだよ・・・熱海の匂い、大好き」

熱海「私も、好きだよ」

タマ子「アタイ、死んでも恨んで出たりしないから。安心しな」

熱海「何よ、急に。でも、そんなこと言わないで出てきてよ。恨んでもいいからさ」

タマ子「ふふふ、考えとく」

熱海「よろしくね」

ゆっくり目を閉じるタマ子。

気持ちの良い風が二人を撫でていく。

おしまい